

恵信尼の里「とひだのまき」に関する考古学的考察

加 藤 学

はじめに

建永2（1207）年2月、浄土真宗の開祖・親鸞（承安3（1173）年－弘長2（1263）年）は、後鳥羽上皇が法然の専修念仏を弾圧・禁止したことで越後国府へ流刑となり、越後国分寺にほど近い上越市居多ヶ浜（こたがはま）に上陸したとされる。流刑の地となった越後国府の位置は定かでないが、上越市に存在したことは確実視されている。中世期においては、直江津駅南側に広がる至徳寺遺跡を越後国衙とし、その周辺に国府が所在したとする見解が有力である〔宮・山田^{監修}1986〕。至徳寺遺跡の年代は、11世紀～17世紀で、親鸞が流刑となった時期にも展開する。同遺跡は、当時としては大規模な港湾都市でもあり、親鸞がその周辺で過ごしたことが想定される。

親鸞は、流刑の地において越後国の豪族・三善為教の子・恵信尼（寿永元（1182）年－文永5（1268）年？）と結婚したとされる。結婚の時期については諸説あるが、流刑時に結婚したとする見方が有力である。親鸞は、流刑が解かれた後、恵信尼を伴い関東で布教した。恵信尼は、関東での布教の後、晩年を「とひだのまき」で過ごしたことが、子・覚信尼にあてた「恵信尼書状」から明らかとなっている。「とひだのまき」の位置については諸説あったが、現在では頸城平野の南東部、上越市板倉区米増の「とよ田」をあてることが有力な一説となっている。

本稿では、恵信尼が晩年を過ごした「とひだのまき」について、郷土史家・宮腰幸（第1図）の地道な研究と丸山貢による写真記録を紹介するとともに、近年の考古学的調査の成果も踏まえた考察を行いたい。

第1図 恵信尼寿塔と宮腰幸

1 上越市板倉区の位置と歴史的環境

上越市板倉区は、新潟県の南西部、関川によって作り出された高田平野の南東隅に位置する（第2図）。板倉には、信越国境の関田山地から流れる大熊川・別所川によって作り出された扇状地が広がり、地域全体が緩傾斜地となっている。

古代においては、越後国頸城郡板倉郷に相当する。中世に入ると、板倉は国司や在庁官人によって開発された「保」（国衙領）となり、「田井保」（貞和3（1347）年11月16日沙弥某施行状／居多神社文書）に相当する〔花ヶ前2003〕。また、「とひだのまき」と隣接する熊川地区は、戦国期に箕冠城の城下町の一部であったものが、近世に現在の集落に移行したとされている〔小村^{ほか}1989〕。本稿で取り上げる仲田遺跡は、現在の熊川集落の前身であった可能性がある。

2 恵信尼寿塔

(1) 恵信尼寿塔の存在

恵信尼は、生前に丈七尺の五重の石の塔を塔師に作らせた。このことは、「恵信尼書状」の第七通と第八通に書かれている。この五輪塔の所在については諸説あった。上越市板倉区米増五りん田の五輪塔（第11図右）、妙高市吉木の勝徳寺境内の五輪塔（第11図左）が、その候補として挙げられてきた。1959年に発表された梅原隆章（富山大学）の論文によって、板倉区米増の五輪塔が恵信尼の寿塔として比定され、西本願寺はこれを支持した。これにより、板倉区米増にある五輪塔が恵信尼寿塔とされ、1963年には「本願寺国分別院」の飛地境内として整備された（第3図）。2005年には、「あしんの里記念館」として整備され、五輪塔は現在、その一角に安置されている。

(2) 恵信尼寿塔の発見

恵信尼寿塔は、戦後から郷土史家によって関心がもたれてきたとされる。大場厚順〔2003〕は、その発見の経緯から、評価に至る一連の検討を詳細に行っているのので、ここではその概略を紹介する。

恵信尼寿塔が学界に公になったのは、梅原隆章が宮腰幸の案内で現地調査したことが始まりとされる。梅原により、「比丘尼墓」と呼び伝えられていた五輪塔が紹介された。しかし、この五輪塔には「恵信尼書状」と決定的な相違があった。恵信尼は丈七尺の五輪塔を作らせたとするが、この五輪塔の高さは七尺ない。梅原は、曲八寸をもって一尺とする「もんぎ」という尺度が、奈良・京都の寺で使用されていることと対比した。そして、この尺度を用いれば、七寸に相当するとした。井上鋭夫〔1966〕は、この考え方や時期において否定的な見解を示したが、妙高市吉木の勝徳寺境内の五輪塔を寿塔と考えていた白銀賢瑞をはじめ、山崎寛隆等によって支持され、今日に至る。

(3) 恵信尼寿塔の発掘調査

恵信尼寿塔は、1954年4月に米増青年会（会長：宮腰英武）により発掘調査されている。調査には、直江津の中澤正治が立ち会ったとされる（第4・6～10図）。正式な報告はなく明らかでないことが多いが、丸山貢撮影の写真には調査時の様子が垣間見られる。やぐらを組み石塔を移動した様子（第4・5図）、鶴嘴やスコップを用いて掘削している様子（第5図）、五輪塔下部から採取した土壌を観察している様子（第6図）等が撮影されている。写真を見る限り、発掘調査とはいえ、今日的な調査手順はとられておらず、下部遺構の検出等はいわゆる行われていないことが分かる。

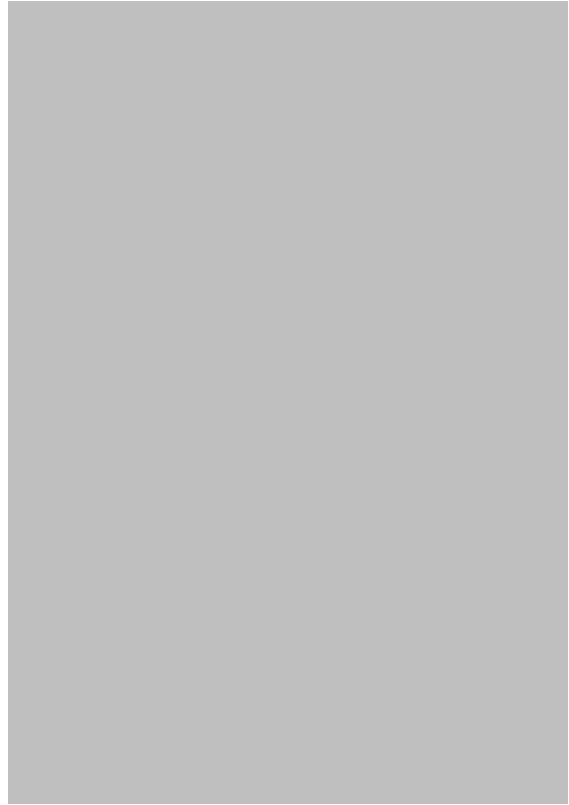
なお、井上鋭夫〔1966〕は、調査に携わっていないものの、遺骨が出土しなかったことに言及している。酸性土壌の日本列島においては、骨は火葬していなければ残ることは極めて稀である。土葬による中世墓から遺骨が出土する事例は少なく、五輪塔下部から遺骨が出土しなかったことは、一般的な状況といえる。すなわち、遺骨が出土しなかったことをもって、墓でないということとはできない。また、石塔の下部に火葬骨を入れた骨壺が納められるようになるのは14世紀半ば以降であり〔水澤2009〕、出土品がなかったことは特異な状況ではない。



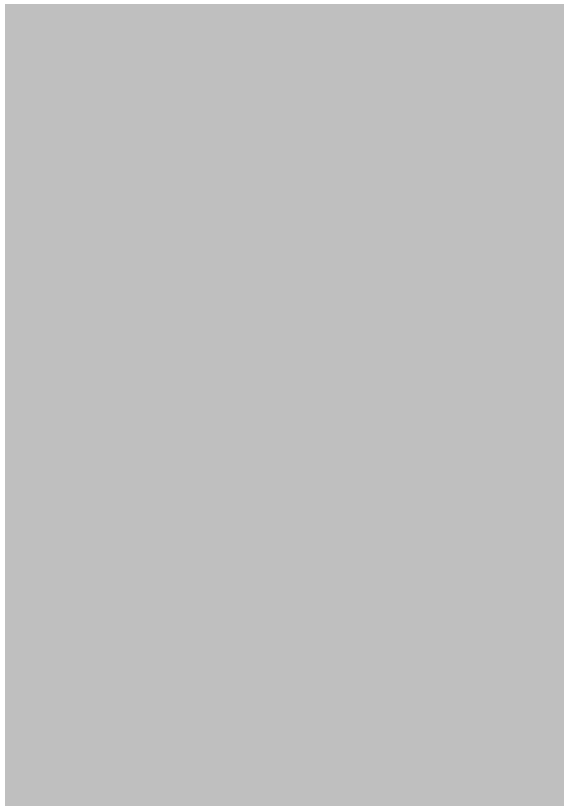
第3図 恵信尼寿塔（1973年頃撮影、新潟県教育委員会埋蔵文化財包蔵地カードより）



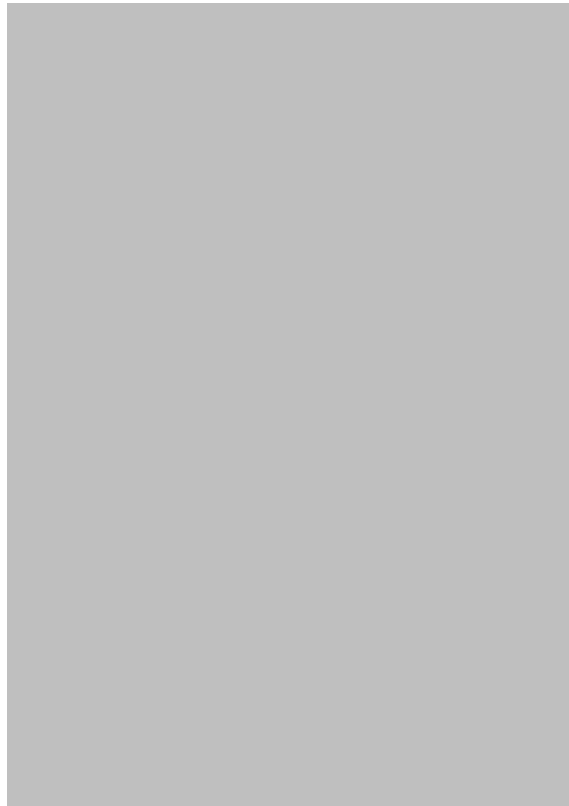
第4図 発掘調査風景(1)



第5図 発掘調査風景(2)



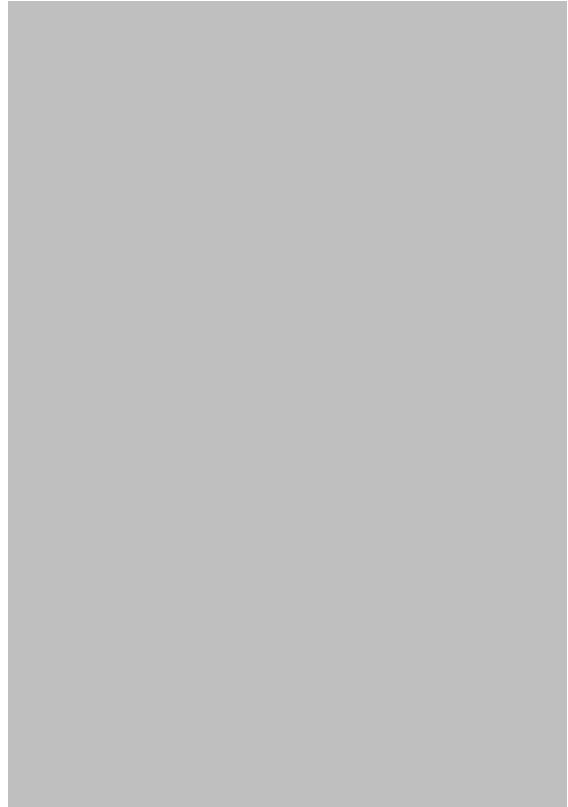
第6図 発掘調査風景(3)
戴帽しているのが中澤正治(以下、同)



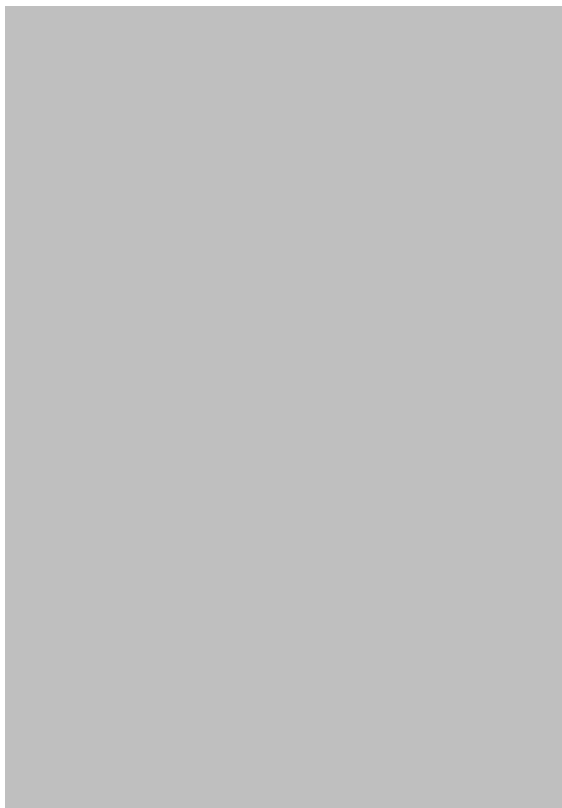
第7図 発掘調査風景(4)



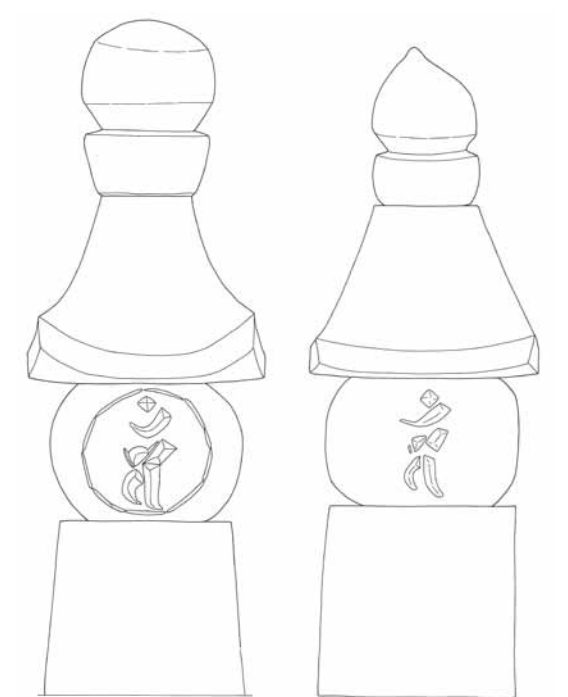
第8図 発掘調査風景(5)



第9図 発掘調査風景(6)



第10図 発掘調査風景(7)



第11図 恵信尼寿塔(右)と新井市吉木勝徳寺の五輪塔(左)の実測図(S=1/20)

(4) 恵信尼寿塔の今日的評価

水澤幸一〔2003〕は、恵信尼寿塔を観察・実測し、公表している（第11図右）。石材は安山岩で、大きさは空風輪 40.5cm×27.5cm、火輪 44cm×58.5cm、水輪 33×49.5cm、地輪 49cm×47.5～50.5cm、総丈 166.5cmの五尺五寸塔と評価している。

また、水澤は上越地域の五輪塔の調査をととして、14世紀代に4尺を超える少数の大型塔が造られ始められたとした〔水澤 2003〕。恵信尼寿塔のみを評価したわけではないが、恵信尼書状が書かれた年代が1260年前後と推定されることから、この年代観と完全には一致しない。五輪塔は、一般的に小型化し簡略的形態変化が見られるとされる〔浅野 2001〕。また、水輪の最大径が中間部付近にある特徴は、鎌倉～南北朝期に位置付けられる〔岡本・加藤編 1967〕。これらの状況を踏まえれば、恵信尼寿塔は鎌倉期に位置付けることができ、総体的により古い段階に位置付けることができる。北陸における五輪塔の出現は13世紀後半であり〔水澤 2009〕、恵信尼寿塔は最も古い段階の石塔といえるかもしれない。五輪塔の形態変遷に関する研究の動向を受けて、改めて検討を要する。

なお、水輪は寸胴タイプで、彫りの浅い「バン」が刻まれている。井上悦夫〔1966〕は、大日如来の種子である「バン」が刻まれていることを指摘し、恵信尼及び浄土真宗との関係に慎重な見解を示している。

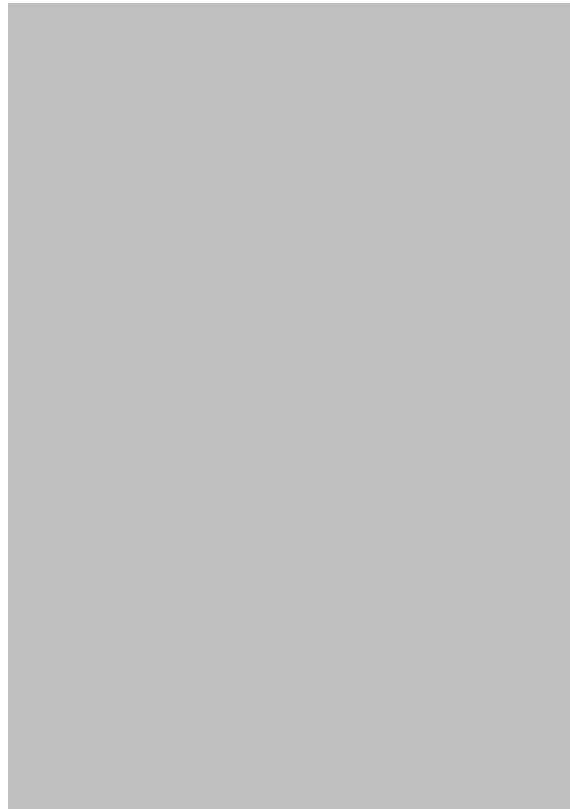
(5) 恵信尼寿塔周辺のかつての景観

恵信尼寿塔は、かつては水田の一角に、コブシの木と隣り合わせるように存在した。その様子を示す記録写真が、丸山貢によって残されている。当時、写真機はまだ広く普及しておらず、貴重な写真である。丸山は郷土史家・宮腰幸（第1図）の調査にカメラマンとして随行した経緯から、恵信尼寿塔の写真を各季節、撮影している。整備された現況とは著しく異なり、田園風景の中に、ひっそりとたたずんでいる様子を理解できる（第12・13図）。

1958年11月、板倉区山部の西蓮寺・藤纏賢珠の案内による文学博士・金原省吾（新潟大学高田分校主事）の踏査、1959年6月6日、恵信尼研究で著名な新潟佛教會長・蒲原霊英が参詣した際の写真記録も残されている。



第12図 恵信尼寿塔(1957年ころ撮影)



第13図 恵信尼寿塔(1962年ころ秋撮影)



第14図 金原省吾の踏査(1958年撮影)
五輪塔に手を触れているのが金原省吾



第15図 愛知県からの参詣者(1958年11月19日撮影)
前列右端が藤経賢珠, 後列左端が宮腰幸



第16図 蒲原霊英一行参詣(1)(1959年撮影)



第17図 蒲原霊英一行参詣(2)(1959年撮影)

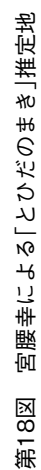
3 「とひだのまき」の位置

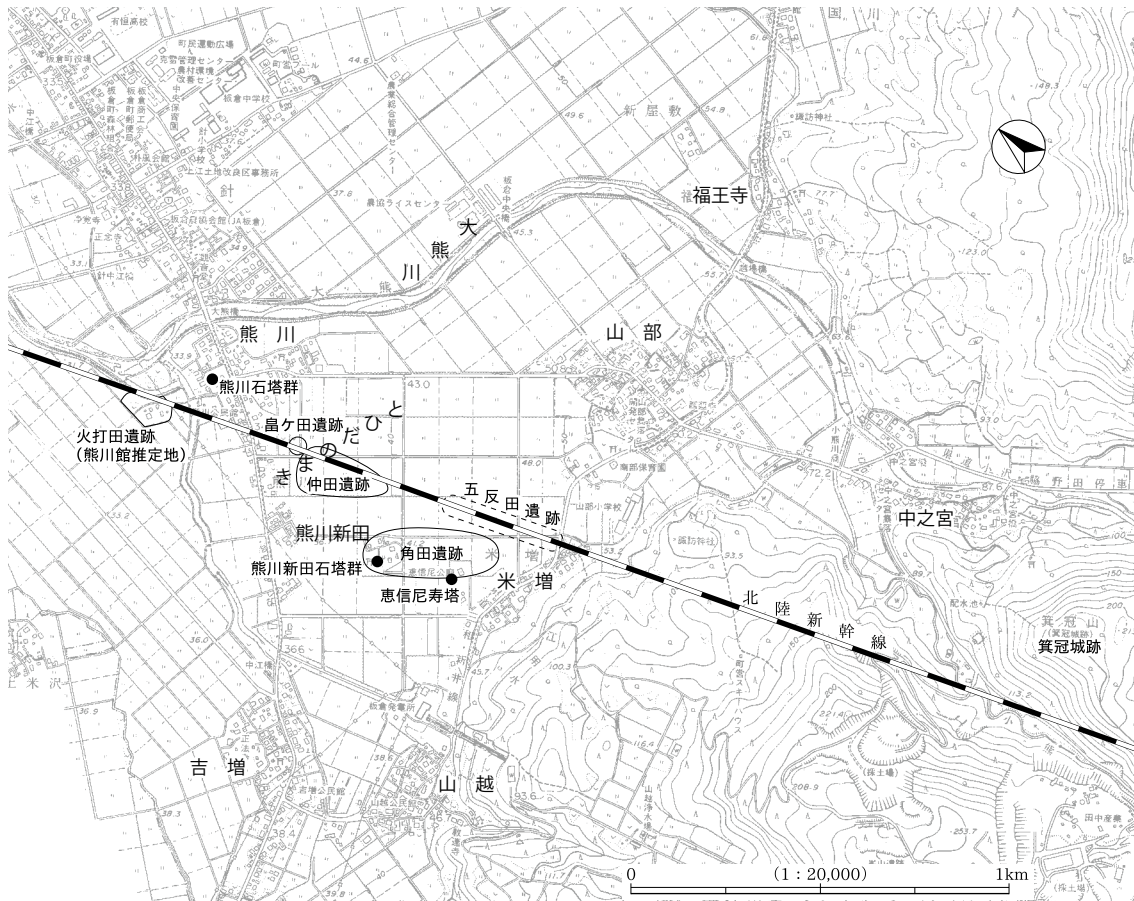
関東での布教後、恵信尼が越後に戻った理由については史料がなく不明である。断片的な状況証拠をもとに、大場厚順は上越市板倉区域に残した所領・財産の管理、孫たちの世話が目的であったとした。子は、板倉区域に住んでいたとされる。栗沢信連房は「栗沢」(第18図)、益方は玄藤寺地内の「マスカタ」、高野禅尼は「高野」に住み、小黑女房は安塚区の「小黑」に嫁いだとされる[大場2003]。これらのことから板倉は、恵信尼にとって、ゆかりの地であったことは間違いないといえてよいであろう。

さて、それでは「とひだのまき」は具体的に、何処に比定できるのであろうか。その位置については諸説ある[大場2003]が、「とひ」を「樋」の転訛と解し、五輪塔がある米増地区の「とよ田」をあてることが一説となっている。宮腰幸は、小字名を丹念に調べることで、かつての土地利用を示す地名を明らかにし、「とひだのまき」を「とよ田」周辺に比定した。第18図は、宮腰が作成した図を、トレースしたものである。これを見ると、大字界と小熊川に挟まれた「とよ田」周辺が「とひだのまき」であることを明記している。「とよ田」の付近には、恵信尼寿塔がある「五里ん田」のほか、「お館」「びくやしき」という地名がある(第18図)。これらは、字のごとく、館や屋敷が存在したことを示す地名と理解してよからう。「お馬田」の地名も注目される。京都に書状を届けるためには、馬が必要であることから、その飼育に用いた「牧」であるのかもしれない。

また、大場[2003]は、書状を持参する人が行き来するところの近くでなくてはならないとし、交通の利便性を「とひだのまき」の重要な条件とした。板倉は、平野と山地の境界付近に位置する。すなわち、

畫
拼
圖





第19図 「とひだのまき」と仲田遺跡・恵信尼寿塔(板倉町役場作成「板倉町全図その1」1:10,000原図)

板倉周辺までは関川の流れが緩やかで、かつ水量が多いことから舟運を利用できる（第2図参照）。これより上流は、舟運を利用することは困難と考えられ、新井・板倉周辺は交通の要衝であった可能性が高い。関川から板倉へのアクセスは、大熊川などの支流を利用することを想定することができる。舟を利用しないとしても、川に沿って形成された自然堤防を伝うように「道」が存在した可能性も考えられよう。このように考えると、書状の持参者が馬を利用しようと舟を利用しようと、板倉が、必ずしも交通の利便性が悪いとは言えない。むしろ、「とひだのまき」の位置は、地縁を重視して考えるべきであろう。

4 仲田遺跡の調査成果

宮腰幸が示した「とひだのまき」周辺には、角田遺跡・仲田遺跡・五反田遺跡など、古代～中世の大規模な集落が展開する。中でも、仲田遺跡は、恵信尼寿塔の北 300 m に所在する中世集落である〔加藤ほか 2003〕。関川の支流、大熊川・別所川が作り出した扇状地の扇端部に立地し、小熊川の旧流路に沿うように集落が検出された。仲田遺跡は、宮腰が「とひだのまき」と想定した範囲と重複するように広がる（第 18・19 図）。

北陸新幹線の建設に伴い、5,100㎡を発掘調査した結果、中世集落が極めて良好な状態で検出された。第 20 図のとおり、足の踏み場がないほど、建物の柱穴や井戸などの遺構が密集する範囲があった。

調査範囲からは、掘立柱建物 31 棟以上、井戸 85 基、土坑 59 基、溝 17 条など、膨大な数の遺構を検出したが、これらすべてが同時期に存在したわけではない。出土した遺物の年代から、11 世紀後半～15 世

紀の400年間、ほぼ継続的に集落が展開したことが分かった。したがって、膨大な数の遺構は、その間に築かれた遺構が累積した結果といえる。一時期にどのような集落が展開したのかを知るためには、様々な角度から慎重に分析しなければならない。

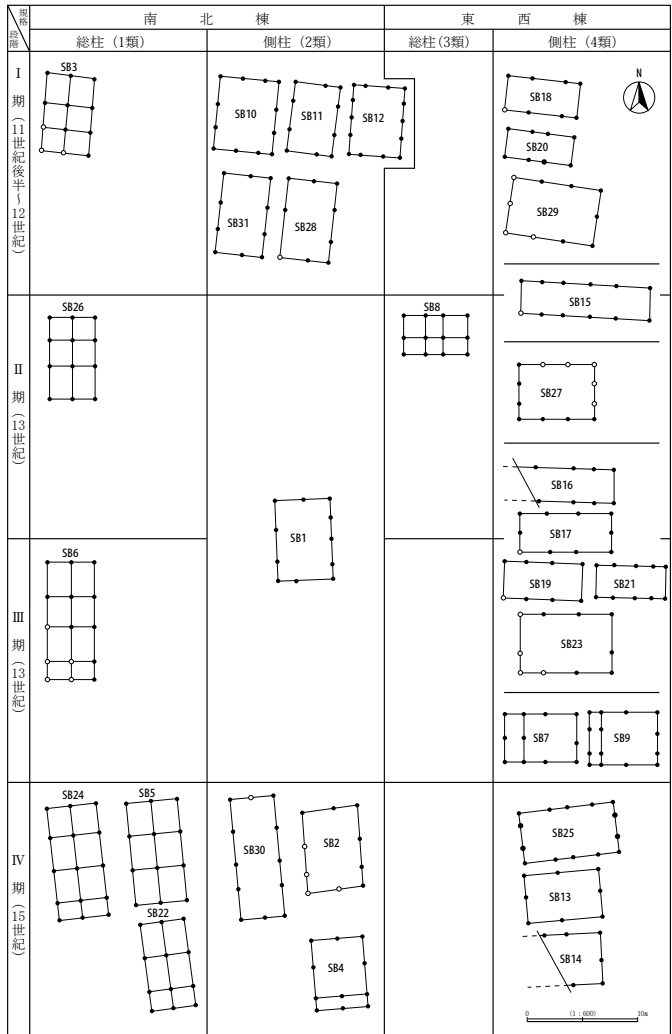
分析においては、遺構の切り合い関係を重視した。また、掘立柱建物の主軸方向の相違にも有意な関係性があることを見出すことができた。掘立柱建物は、東西南北を強く意識して建てられたものの、その時々で、掘立柱建物の構造や方向が異なることが明らかになったのである。当時の人々が、計画的に集落を構築したことを読み取ることができよう。

具体的に見ていくと、掘立柱建物の主軸が、やや東に偏る1群（N4°E～N7°E）、ほぼ南北方向を示す2群（N0°～N2°E）、やや西に偏る3群（N5°W～N7°W）に分類することができた。さらに、建物間の切り合い関係を整理していくと、1群（Ⅰ期）→2群古段階（Ⅱ期）→2群新段階（Ⅲ期）→3群（Ⅳ期）と整理することができた（第21図）。そして、掘立柱建物との切り合い関係がある井戸から出土した遺物の年代観を考慮しながら各期の年代を特定した。

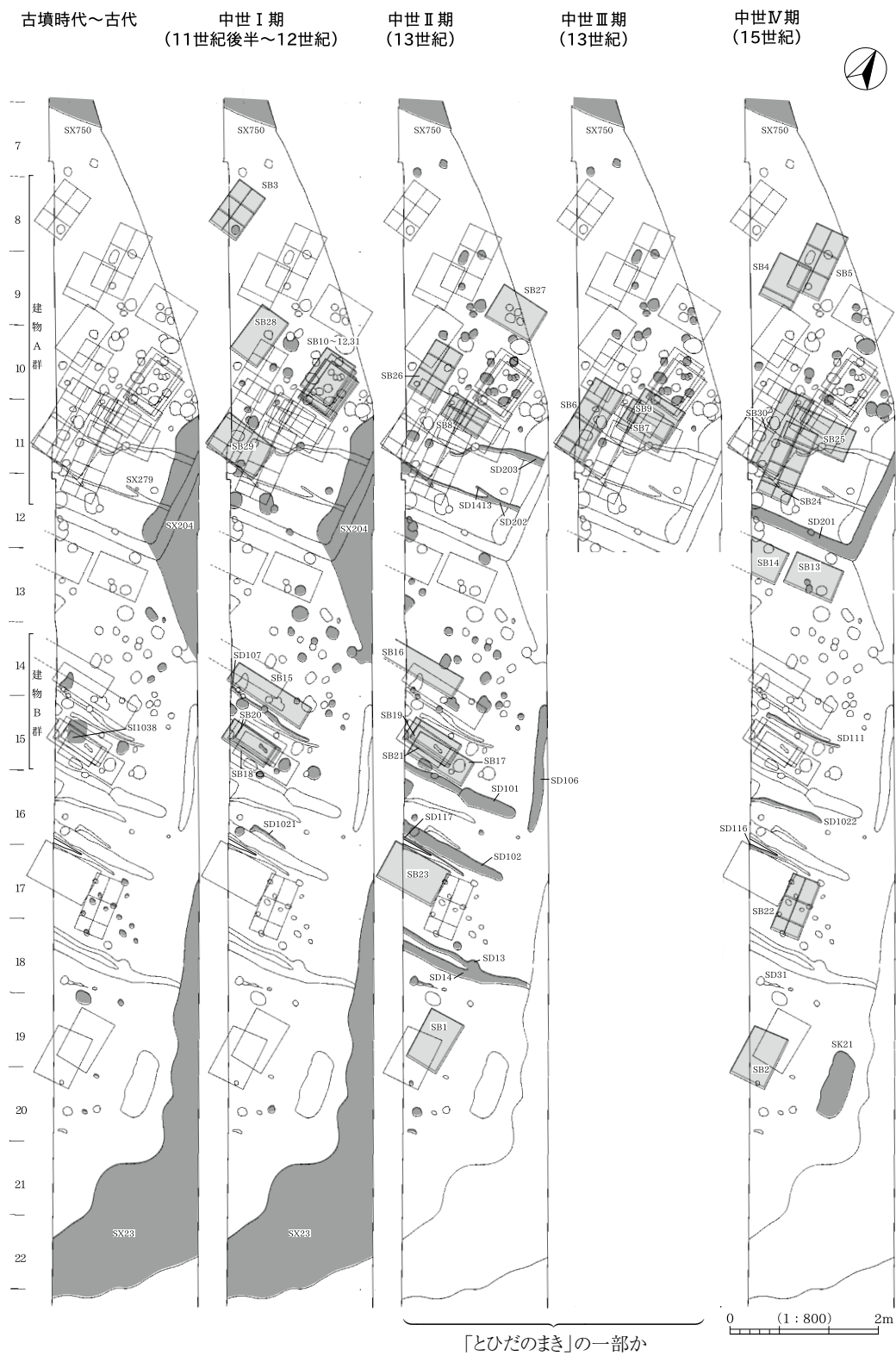
これらの分析を経て、仲田遺跡の中世集落は、Ⅰ期（11世紀後半～12世紀）、Ⅱ期（13世紀）、Ⅲ期（13世紀）、Ⅳ期（15世紀）に分解することができた（第22図）。そして、Ⅲ期とⅣ期の間に相当する14世紀の遺構・遺物はまったく見出されなかった。1361年（康安元年）には焼山が噴火しており、その影響を受けて集落を移転した可能性もあろう。実



第20図 仲田遺跡で発見された中世集落



第21図 仲田遺跡の掘立柱建物の構成と変遷



第22図 仲田遺跡における中世集落の変遷

際、焼山により近い妙高市の中世遺跡においては、甚大な被害を受けたとされる〔新井市教育委員会ほか2000〕。しかし、仲田遺跡の場合、明瞭な降灰の痕跡などを検出できておらず、調査範囲外に14世紀の集落が築かれた可能性も否定できない。15世紀には再び仲田遺跡に集落を築かれるものの長くは続かず、16世紀以降、集落は断絶する。おそらくはこの時期に、現在の集落の礎となった近世集落へと移行したのであろう。

おわりに ―「とひだのまき」と仲田遺跡―

宮腰幸が推定した「とひだのまき」が、仲田遺跡の調査範囲と重複することは、ほぼ確実と見てよい（第18・19図）。そして、発掘調査により中世集落が良好な状態で検出され、かつ、恵信尼が晩年を過ごした13世紀中頃にも集落が展開することが明らかとなった。宮腰の考察を勘案すれば、仲田遺跡は恵信尼と何らかの関係をもった集落と考えるべきであろう。少なくとも周辺地域においては中核的な中世集落であり、長期間、継続的に展開する。このような中世集落は、「館」等を除けば、あるようでなかなか見つからないものである。仲田遺跡は、宮腰がいう「三善庄」の中心地であったのかもしれない。

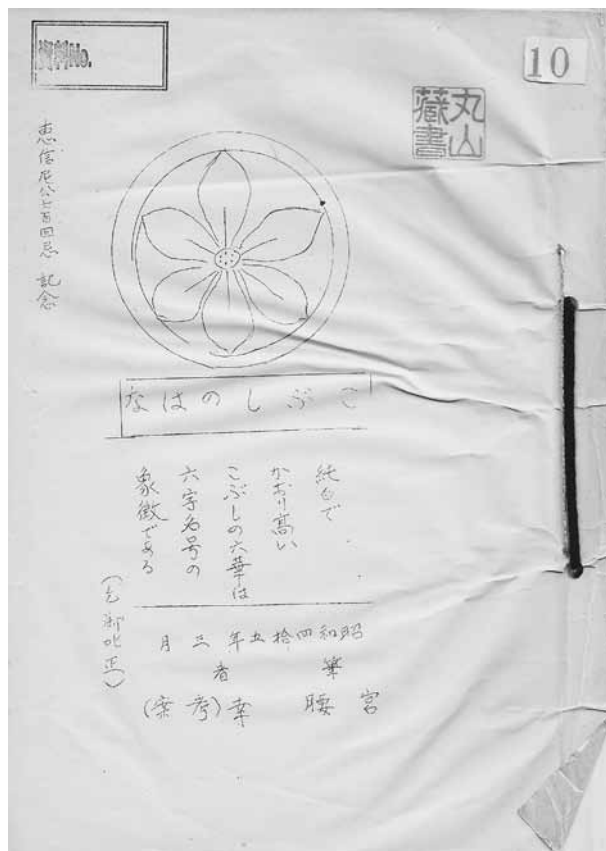
仲田遺跡から出土した遺物には、高級な輸入陶磁器や、西南日本に生育するイスノキで作られた櫛が6点あるなど、高級な遺物が目に付く。当時の交易の広さをうかがい知ることができるとともに、地域において重要な集落であったことを傍証するものである。

仲田遺跡の発掘調査範囲においては、宮腰が推定する「とひだのまき」の一部を観察したに過ぎないのである。地域史研究において、この一帯は極めて重要であり、埋蔵文化財保護はもちろんのこと、地域に残されている史料の保全にも努めなくてはならない。

宮腰幸の地道な研究は、『こぶしのはな』という冊子となっている（第23図）〔宮腰1970〕。極めて重要な記録が残されているにもかかわらず、私家版であるが故、この資料の存在そのものを知っていた研究者はどれだけいたであろうか。筆者も多分に漏れず、仲田遺跡の調査担当者でありながら、その存在すら知らなかった。

宮腰が地道な取り組みに基づき、積み上げてきた資料に触れたとき、この研究を何らかの形で保存し、永久に保管していく必要性を感じた。このことが、本稿を草する契機となったのである。できることであれば、地域の教育委員会や図書館など、公的機関で適切に保管・活用していくことが望まれよう。少なくとも複写を残し、末永く後世に宮腰の研究を伝えていくべきである。本研究が、その一つとなり、恵信尼研究の一助となれば幸いである。

（本文中、敬称略）



第23図 宮腰幸 著『こぶしのはな』

謝辞

本稿は、新潟県立歴史博物館で2014年に開催された「親鸞－なむの大地－」に寄稿する際、得た情報を基に執筆したものである。寄稿をお薦めくださった新潟大学・矢田俊文先生、新潟県立歴史博物館・前嶋敏氏に、深く感謝申し上げる次第である。

そして、資料を永年にわたって大切に保管され、本研究にそれを提供いただいた丸山貢氏に深く感謝申し上げたい。丸山氏の資料保管が無ければ、本研究において掲載した写真記録（第1・4～10・12～16図）は、すでに失われていたかもしれない。縁あって、それらの資料に触れることができ、ここに公表することができたのは、望外の喜びである。

本研究で公表した資料が、広く、末永く活用されていくことを望みたい。

引用文献

- 浅野晴樹 2001「墓葬と供養 供養の諸形態」『図解・日本の中世遺跡』東京大学出版会
- 新井市教育委員会・新井市遺跡発掘友の会 2000『新井市遺跡発掘10年のあゆみ』新井市教育委員会
- 井上鋭夫 1966「中世の頸南」『頸南－中頸城郡南部学術総合調査報告書－』新潟県文化財年報第六 新潟県教育委員会
- 梅原隆章 1959『真宗史の諸問題』顕真学苑
- 岡本 勇・加藤晋平編 1967『新潟県新井市における考古学的調査－大貝遺跡・石塔類－』立教大学博物館研究室調査報告6 立教大学学校・社会教育講座博物館学研究室
- 大場厚順 2003「真宗の展開」『板倉町史 自然・通史編』板倉町
- 小村 弼ほか 1989『角川日本地名大辞典 15新潟県』角川書店
- 加藤 学ほか 2003『仲田遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第128集 新潟県教育委員会・財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 加藤 学 2014「恵信尼の里「とひだのまき」と中世遺跡」『親鸞となむの大地 越後と佐渡の精神的風土』親鸞となむの大地展実行委員会
- 花ヶ前盛明 2003「鎌倉・室町時代」『板倉町史 自然・通史編』板倉町
- 水澤幸一 2003「石造物」『上越市史叢書8 考古－中・近世資料－』上越市
- 水澤幸一 2009「北陸の中世墓」『日本の中世墓』高志書院
- 宮 榮二・山田英雄監修 1986『日本歴史地名大系第15巻 新潟県の地名』平凡社
- 宮腰 幸 1970『こぶしのはな』私家版